

表紙・絵

日没。この季節、夜になるのがとても早く、夜に変わる瞬間の空がともきれいです。そんなイメージを



Ⅱ 美術倶楽部(CATS)
(文学部2年、川崎華菜)

伝えていけるような気がします。

描きました。
私自身、空を見るのが大好きです。
朝の空、昼の空、
夜の空、曇りの空
……いっぱい空には表情があり、そのすべてが何かを

Hakumon Chuo ちゅうおう

2004

冬季号

2004年(平成16年)12月1日発行 No.189



キャンパス・コラム

礼儀

私が大学へ自転車通っている狭い上り道の両側に養護施設の建物が200メートルばかり続いている。毎回、その歩道を散歩したり移動したりしている知的障害者と言われる青年男女に出会うのだが、そのなかに、大きな声で「おはようございませーす」と私に呼びかけてくれる人たちが、少なくとも必ず一人は居る。私も相手に負けない位の声で同じ言葉を送って返す。つい嬉しくなって片手を挙げたりもする。一瞬大きな幸福を感じる。そうした時の彼らの生き生きとした、清朗で開けっぴろげな表情はなんととも言えず爽快だ。

ところで私は、大学での講義・授業を始める前にはいつも、禿げ頭を下げて挨拶の言葉を発するのが、無視されることが往々にしてある。そんな時にはとても意気沮喪して、すぐにでも教室から退散したいとさえ思う。

学生諸君だけに限らない。犬を伴っての早朝散歩の際に、こちらが挨拶をしてもなんら反応を示さないおじさんたちも居る。暗澹たる気分になります。あるいは、銀行や郵便局、また医院などで名前を呼ばれても全く返事をせず、ぬーっと立ち上るだけの人が多いのも気になる。老若を問わずです。

いずれも私には理解を絶するという他はない。「対話の欠如」とか「コミュニケーションの不足」とかいった高尚なハナシではない。好むと否とにかかわらず社会的存在である人間を結ぶ最も基本的・原初的な礼儀のこのような衰微はどこからくるのか。ちなみに、機械に挨拶することは無用であり、礼儀を心がける必要もない。いまや対人関係ならぬ対機械関係が重きをなす時代なのかも知れない。そんな世の中にあっては「たかが挨拶」でしょうが、それでも「されど挨拶」、と小さな声で呟きたい。

広報委員 前野光弘 (文学部教授)